

The Newsletter

HOSEI I.J.S.

No.3 Mar.2006.



2005年12月1日—3日 日仏シンポジウム

CONTENTS

シンポジウム報告	2
成果報告会	4
定例研究会報告	5
研究会報告	6
トピックス	10
活動の足取り/今後の活動計画/編集後記	12

国際日本学シンポジウム

「日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究—」

安孫子 信

(法政大学文学部教授)

- 日 時：2005年12月1日(木)～3日(土)
- 場 所：パリ日本文化会館(フランス・パリ)
- 主 催：法政大学国際日本学研究センター、法政大学国際日本学研究所、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所

国際日本学の構築を目指して

—パリ日本学シンポジウムを振り返って—

「日本学とは何か」と題された国際シンポジウムを昨年12月1日～3日に、法政大学国際日本学研究所・フランス国立科学研究院・パリ日本文化会館の3者共催で、パリ日本文化会館で行なってきた。日本側から10名、ヨーロッパ・アメリカ側から9名の計19名の参加者が研究発表を行った。法政からの参加者は6名である。参加国別で言えば、日本9名、フランス3名、ドイツ3名、韓国、アメリカ、イギリス、ベルギー各1名ということになる。また参加者の専門分野は、哲学、歴史学、思想史、美術史、宗教史、文化人類学、社会学、文学と多岐に渡るものであった。

日本学の対象、それは言うまでもなく‘日本’である。‘日本’は、おもには日本において、また日本人の手で研究されてきた。ただ‘日本’が、日本を越えて、世界で、世界の人々の手で研究されてきたことも事実である。この内外二様の研究はかつてはそう交わることなく、それぞれに閉じて遂行されてきたのが、今日では接触し、突き合わされることがむしろ常態となっている。そしてここから問題が生じてくるのである。すなわち、自然科学では問題とはならない国境が、ここでは意味を持ち、内外での日本学が、必ずしも直ちに相互互恵的な対話を成立させることができないのである。今回のシンポジウムの中心的企画者であったフランス国立科学研究院キブルツ教授が起草した趣意書からおおよそ引けば、以下のようなことになる。「今日アクチュアルな問題である、天皇制、国家、神道、靖国神社などをめぐって、日本側からはしばしば日本の特殊性といったことが持ち出される。すなわち、外国人は誤解している、あるいは外国人には理解できないといった言い分が持ち出される。これらの言い分は正しいのか？ 文化人類学的に言えば、これは文化の相対性さらには非共約性の主張にもなるが、それは正しいのか？ 他方、このような問い合わせが今度は日本側からの別の問い合わせを引き起こす。日本側への問題提起の陰で働いているように見える西洋側の科学性、客觀性といった議論の基準、それはそれでは本当にその名に値するものなのか？ それ自身、西洋的特殊性といったことではないのか？」。こうして日本学を内外で分かつ溝は、きびしく見れば深いのであるが、この溝を埋めることは可能なのか否か、つまりは国際日本学は可能なのか否か、それを問う試みが今回のシンポジウムであった。

シンポジウムの成果の厳密な評価はさらに時間をかけてなされるべきであるが、そこで打ち出されていた、上の問い合わせに答える方向性のいくつかは、ここで簡単に纏めよう。それを以下に列記していく。

1) 主としてヨーロッパ側発表者、とくに社会学、文化人

類学系の参加者が取り上げた問題として、マンガに代表されるマス・カルチャー(Jカルチャー)の問題がある(リヒター氏、ブイスー氏)。そこで強調されていたのは、日本発のこの文化現象は、国境を超えて、国境とは無縁に、世界共通現象として振舞っているということであった。これが意味することは、日本学の相貌もこのことで変化せざるをえないということである。日本学が扱うべき日本文化は、今日どこかで‘日本’ということを必要とさせなくなるような側面を持つのである。ブイスー氏が逆説的なこととして指摘していたのは、フランスでのマンガ愛好者は、必ずしも日本愛好者ではないということであった。ここには、今日の日本学がまさに扱うべき、日本の、そして日本文化の可能性と問題点とがともに示されていたと思う。

2) 残り大半の発表の基調は、それでも、内からの日本学と外からの日本学が、やはりなかなか超えがたい溝で分かたれているということの確認であった。その際にも、①そのこと自身の歴史的・文化的背景を丁寧にトレースするもの(ペフ氏、ヘンドリー氏)、②その相対主義的状況をこそ、文化というものの豊かさの現われと見て、ポジティブに捉えていくべきだと主張するもの(キブルツ氏)、また、③相対主義か普遍主義かという不毛な二者択一を出て、誤解が時に伴つても接触し翻訳し合う努力を続けている文化と文化の‘関係’をこそ大切にしていくべきだと主張するもの(島田氏)があった。さらには、④内と外との差は力の差(強者と弱者、中心と周辺)を同時に含んでいて、そこでは理念に基づく大きな解決は不可能、まずは中心(強者)の文法・論理を学びそれに従いつつ、様々な戦略によって、内外、強弱の関係を徐々に修正していく他に溝を克服する道はないという、文化学における政治的側面を詳細に説く主張もなされていた(桑山氏)。



3) 文化と文化の関係性、つまりは翻訳の問題は、樋口一葉『たけくらべ』の英訳について語った田中氏の発表のまさにテーマであったが、この問題は様々な機会に繰り返し提起されていた。たとえば、ブイースー氏はマンガの翻訳、とくに擬音語の扱いに触れていたし、またベフ氏は、柔道が世界スポーツとなり、トヨタが世界企業となる際にも翻訳は機能しているのであって、それらが同一性を保ちながらも変容されていった様を正確に辿ることは、国際日本学の基礎的作業とならなければならないと指摘した。さらにキブルツ氏は、同時通訳で行われたこのシンポジウムでの議論自身を「通訳・翻訳」問題の資料として取り上げていくべきだと主張した。

4) 最後に取り上げるべきは、日本学をいわば内側から開いていくこうという試みで、一つには、ドメスティックな日本学に、できるだけ客観的(世界的)基準を適用していくべきだという主張である。花見が日本のであるということを、ただ情緒、心性の問題とはしないで、そこに社会学的・文化人類学的指標による分析を加え、世界で見られる同様現象と

の類似・差異を客観的に探るべきという主張がなされたし(白幡氏)、日本史の具体例でその実践の可能性に触れた発表もあった(澤登氏)。もう一つは、ドメスティックな日本学を(少なくとも)アジアの視点に開いていくべきだという主張で、チエ氏はまさにその観点から、自身の発表においてのみならず、あらゆる機会に、日本人が看過しがちなアジアとの結びつきに触れた有意義な発言を行っていた。樺山氏も柳田国男を取り上げ、朝鮮文化に大きく開いていた柳宗悦の仕事との関係(無関係)に触れて、柳田民俗学の、実現はされなかつたが、ありえたもう一つの可能性を説いた。さらに、ヴァンデ・ワレ氏は、漢字文化圏研究といったことで、そのような試みがすでに開始されているとの指摘を行った。

以上、正式報告書の刊行に先立ち、断片的にではあるが、パリでの国際シンポジウムの成果の紹介を行ってみた。今後の息の長い作業に待たなければならない部分は多いものの、以上の紹介からも、今回のシンポジウムが、国際日本学の豊かな可能性を再確認させるものであったことは理解していただけたのではないかと考える。

プログラム

Thursday, December 1

1. Words of Welcome by the host, NAKAGAWA Masateru
President of the Maison de la culture du Japon à Paris
2. Presentation by HOSHINO Tsutomu
Director of the Hôsei University Institute of International Japan-Studies
3. Introduction by Josef KYBURZ
Centre national de la recherche scientifique
FRE 2886 « Civilisation japonaise »
4. Harumi BEFU
"Nihonjinron, Endogenous vs Exogenous"
「内発的文化論・外発的文化論」
5. KUWAYAMA Takami
"Transcending the Boundaries: The Case of the Anthropology of Japan"
「境界を越えて－人類学的日本研究の場合」
6. General discussion

Friday, December 2

1. Willy VANDE WALLE
"Sino-Japanese Cultural Junctions and Disjunctions from a European Perspective"
2. Steffi RICHTER
"Trapped in the images of "Good Old Europe": Difficulties in de-orientalizing Japanese/Area Studies knowledge production"
「古き佳きヨーロッパ像の呪縛日本学・地域研究の知的生産とその脱オリエンタル化の困難」
3. Jean-Marie BOUSSOU
"How to analyze Japan's growing cultural power: the case of manga in France"
「増大する日本文化のパワーをどう分析するか－フランスにおける漫画のケース」
4. General discussion
5. TANAKA Yûko
"Japanese society of the Edo Period: terms and translation"
「言葉から見える江戸時代の多様な人々」

Saturday, December 3

1. SHIRAHATA Yôzaburô
"Is Hanami (Cherry Blossom Viewing) Unique to Japanese Culture?"
「花見は日本独特の文化か？」
2. KABAYAMA Kôichi
"Ethnology, Folklore and Nation State – From Yanagita Kunio to the Present"
「国民国家をめぐる民族学と民俗学－柳田国男からの展開－」
3. HOSHINO Tsutomu
"Can Watsuji Tetsurô's Philosophy go beyond its Cultural Particularity"
「和辻哲郎の哲学の特殊性と普遍性」
4. General discussion

7. Joy HENDRY
"Anthropologists and their Areas: some thoughts on a Euro/Japanese approach"
8. SHIMADA Shingo
"Rethinking Japanese Studies. Dimensions of Comparison and Translation"
「文化比較と翻訳－文化社会学の考察」
9. Josef KYBURZ
"In defence of cultural relativism: the perception of space and time in Europe and Japan"
「文化相対論の擁護: 空間と時間の日欧比較」
10. CHOE Kilsung
"Japanese studies in Korea in reaction to the cultural legacy of Japanese colonial rule"
「日本植民地下で育った民俗学」
11. General discussion
6. YAMANAKA Reiko
"Is There a Chasm between Western and Japanese Approaches to Noh: Tradition and Contemporaneity?"
「伝統と同時代性－能楽研究の国際化は可能か」
7. SAWATO Hirosato
"Japanese History and National History: where lies the difference?"
「国史と日本史の差異－18～19世紀の日本における一揆・祭礼の集合心性と秩序」
8. Annick HORIUCHI
"Nouveaux regards sur l'histoire de la « pensée japonaise »: les débats récents autour des travaux de Maruyama Masao"
「昨今の〔丸山眞男論〕に読み取れる新たな日本思想史への模索」
9. General discussion
5. ABIKO Shin
"About Two Native Philosophical Thinkings"
「趣味の国民性をどう扱うか－九鬼周造の日本、ベルクソンのフランス」
6. SAGARA Masatoshi
"Can we understand other cultures? The difference of educational systems"
「真の異文化理解は可能か－教室のイメージを例として」
7. Josef KREINER
"Japanese Collections in European Museums and the Development of Japanese Studies"
8. Closing discussion

「国際日本学研究センター、国際日本学研究所 2005年度成果報告会の開催」

日 時：2005年12月17日(土) 13:30—18:20
場 所：58年館2階 総長室付属会議室

国際日本学では、21世紀COEプログラム研究活動部門として4つのテーマタスクフォースを、また、学術フロンティア研究活動部門として5つのテーマプロジェクトにワーキングプロジェクトを加え6つのチームにより活動を行っています。

それぞれのチームのテーマは次のようになります。

21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」

1. 国際日本学の理論構築とタスクフォース間の連携
2. 西欧(独・仏)・中国の日本文化研究の総合的研究
3. 世界の中の能楽
4. 国際沖縄学の構築

学術フロンティア「日本学の総合的研究」

1. 外国の日本学研究事情
2. アジアの中の日本学
3. 古典文化と民衆文化
4. 風土が作る文化
5. 日本の中の異文化
6. 成果の情報化と活用

当日は、前記10の部門全てが、2005年度における研究活動の進捗状況に関し報告をしました。どのチームにおいても、時間的な制約との戦いもあり、報告し尽くしえない感も歪めませんが、大変有意義な報告会となりました。

2006年度はいずれの補助金も最終年度を迎えるため、他のチームの進捗状況を確認しあい、情報を共有化し、今後の研究活動に繋がる貴重な場にすることができました。

(拠点リーダー 星野 勉)



「『国際日本学』の構築について 特に文化のローカル性とグローバル化という問題を中心に」

勝又 浩

(法政大学文学部教授)

日 時：2006年2月24日(金) 15:30—17:30

場 所：ボアソナード・タワー19階 D会議室

2005年12月に法政大学国際日本学研究所から刊行された『国際日本学の構築に向けて』に収められている6名の論文を元に、「国際日本学」の構築について勝又氏の論を展開する発表であった。各論は当然ながら方向性が異なり、「まとめる」のは困難だが、勝又氏は「ローカル性」と「グローバル化」をキーワードに各論文に表わされた〈日本〉・〈日本学〉の性格を検討した。以下、勝又氏が附した項目の順番に従って要点を報告する。

①「国際日本学研究叢書2『国際日本学の構築に向けて』からの刺激」……前述した今回の発表の主旨を説明。なかでも現在の我々の「国際日本学」には中心になるテーマや中心になる問題がないこと、あわせて、「国際日本学」がなかなか分類や体系を持ちにくいことを指摘した。

②「樺山論文を読む」……前書の冒頭論文である樺山紘一「知の国際化に向けて」について、そこに文化のグローバル化のために「バーナキュラー言語」の提唱があるが、文化を政策論として論ずることの危険性について批判した。

③「王敏論文を読む」、④「アイトル論文「戦争と鎮魂」の紹介」……王敏論文「中国における日本研究の研究を中心に一国際日本学研究方法論試論一」に、日中文化認識の「ずれ」を示す例として、日本軍が大連に建てた「日中合同慰靈碑」の存在が大連の人々にとっては日本人の「殺人の罪を隠すための偽りの行為」だとされていることを取り上げた。それを受け、王敏論文にも触れられている日本の「怨親平等」の問題について、現在北海学園大学で教鞭をとるモンゴル出身のアイトル氏「戦争と鎮魂」を紹介した。蒙古軍襲来の碑が仙台・善應寺にあることを不思議に思った論者が、全国に散在する蒙古軍の碑を調査し、北條時宗の命によって行われた蒙古軍追悼を中国僧無学祖元が「不思議」としている事実を発掘している。時宗は空海以来の「怨親平等」という思想に従ったのだが、中国の僧にはそれが理解できなかつた等々である。蒙古襲来という歴史的な事件のなかに日・中・蒙の死生観、宗教観の違いが見えるのだが、これらを要約して勝又氏は、日本人の心性に深く浸透した「恩讐の彼方に」(菊池寛)という感情を指摘する。そして、日本は、日本の極めてローカルな感情を無反省に外国に持ち込むのではなく、外国の事情を知らなければならぬし、また外国も日本の事情を知らなければならぬはずだと本項目を結んだ。

⑤「安孫子論文への批判」……安孫子信論文「趣味の国民性をどう扱うか—九鬼周造の日本、ベルクソンのフランスー」について批判を展開。星野論文にもあるように、九鬼周造は「いき」を「民族の特殊の存在様態の顕著な自己表明の一つ」と捉えているが、なぜか安孫子論文は「いき」を「趣味」だと規定し、九鬼がローカルな文化の研究に留まったことを批

判している。しかし、「翻訳不可能」(星野論文)な文化を研究してこそ「日本学」になるのではないかと、反論した。「いき」の研究をローカルな趣味の研究に過ぎないとしてしまうと、「幽玄」も「もののあわれ」も「禅」も、みな意味がないことになってしまうのではないかと。さらに、安孫子論文の根底には、星野論文にも言う、「欧米類型=普遍的なもの、その「欠如態」としての日本類型=異質で特異なもの」という、日本近代の悪しき西欧コンプレックスが支配していないか、と疑問を呈した。

⑥「国際日本学の条件」……⑤の安孫子批判や、これまでの論文の紹介から、〈国際日本学〉の在り方を探った。「いき」「幽玄」「もののあわれ」「禅」など、諸外国語に簡単には翻訳不可能な「民族の特殊の存在様態」を発掘発見し、対外的に発信することが重要なのではないかという結論に達した。つまり、これまでの日本の支配的論調であるヨーロッパ基準で日本独自の思想を強引に「翻訳」するのではなく、「翻訳」できない日本を世界のなかで相対化することが必要であると主張した。そこで、日本的なものを相対化していくためには、外国のことを知らなければ相対化できないのかという問題にぶつかる。

⑦「ローカル文化としての「私小説」」……⑥で提示された問題について、「私小説」という具体例を挙げることで問題解決する方策に辿り着く。「私小説」は日本人が西洋の「novel」を移入し、模倣するうちに、日本の歴史と風土のなかで独特なスタイルに作り上げてしまった、極めてローカルな小説形態の一つだが、従来はこれを日本の「欠如態」としか評価できなかつた。しかし近年になって、却つて欧米から注目されるようになって、やつと「民族の特殊の存在様態の顕著な自己表明の一つ」であることに気付き始めた。私小説がなぜ発生したか、さまざまな議論があるが、この正しき究明はこれからであると主張した。

⑧「まとめ」……現在進められている「グローバルに〈日本〉を発信せよ」という政策的方法は、「大東亜戦争」当時に行われた文化政策を推進するのと同様の意味で日本を武装することになると警鐘を鳴らした。

(以上の発表要旨の作成は、当日の録音に基づいて、国際日本学研究所学術研究員の松下奈津美が担当した)

テーマプロジェクト③ 「古典文化と民衆文化」

天野 紀代子

(法政大学文学部教授)

「富士山をめぐる日本人の心性」研究会報告

2005年度は毎月一回、様々なルートからく富士山>へアプローチする報告発表を行い、それに参加者が質問・討議する形での研究会を開催している。以下、9月から6回もたれた月例研究会の報告をする。常の参加者は、十名程度といったところである。

1. 富士講の社会的結合と講連合の形成

(澤登寛聰 文学部史学科) 05/9/24

当初は私的な性格であった富士講が、次第に連合体をなし社会的行動をとるようになった意義についての分析であった。「世直し」とは違う形で、信仰共同体が目指すゆるやかな改良とは?「弥勒の世」の実現とはどういうことか、など質問が集中した。

2. 不二道の社会事業(小林秀樹 富士文化研究会)

05/10/22

19世紀の前半に江戸町人の間に広まった不二道は、食行身禄の入定(1733年)百年祭と関係があるというが、宗教というより日常の実践道徳に近いものとされる。提出された資料のうち、不二道で謡われたという「詠歌教訓歌謡72首」と七五調の「孝行いろいろ歌」は、この集団の信仰の姿を知る上で貴重で、検討の余地があると思われた。

3. 富士山と先史時代(金山喜昭 キャリアデザイン学部・

高橋毅 国学院大学大学院) 05/11/26

富士山周辺の16の縄文遺跡のデータ分析から、縄文人にとって富士山がどう意識されていたかを追究した報告である。注目すべきは、これら考古学上の成果と富士山の噴火活動史をつき合わせると、噴火の顕著だった時期と大規模な配石・列石遺構の時期とが重なることで、噴火活動との関係が示唆されたことであった。

4. 富士御師の活動と秩序形成(菅野洋介 駒沢大学大学院)

05/12/24

富士御師の文化活動と社会関係とが、文化・文政期の史料によつていくつか指摘された。『菊田日記』に見える和歌がまじないとして唱えられているなど、和歌のもつ宗教性が課題として挙げられ、また御師が幕府の宗教権威である寛永寺と結びつき、更に陰陽道の土御門家とも接觸している史実など、18~19世紀の富士信仰の多様性と秩序形成とを追究する方向性が示された。

5. 外国人の見た富士山—幕末明治期の旅行記と写真から

(田尻美和子 東京大学大学院) 06/1/28

富士山を記録した外国人の文献が3つの段階(1860年代の公人訪問の時代、70年代の個人登山の時代、80年代の観光登山の時代)を追つて紹介され問題提起された。そこに描かれたスケッチや写真などに、外国人の富士山観は見てとれる。とりわけイザベラ・バード(『日本奥地紀行』)の尖った富士山が皆の関心を集め、未開の地に海から入港する際の異文化に対するイメージの表象なのか、などと様々に語り合われた。

6. ビゴーは富士を描かない(高橋覚 千葉県立美術館)

06/2/25

ジャポニスムの影響を受けたフランス人画家ビゴーは、1882年から18年間日本に滞在し、初めは富士山と鳥居を日本の風景として描くが、明治20年ころを境に富士は諷刺の対象以外では描かなくなる。それは、富士の開発を含む日本の近代化への反発・批判であろうとの見解が出された。映像で紹介された「狂画」には、外国人画家の皮肉な目があり、ジャポニスムの富士山もまた変容する姿を教えてくれた。

2005年度最後の活動は3月25日から27日まで、河口湖町での合宿での研究会であった。参加者16名のうち研究発表者は9名で、様々なテーマによる報告がされている。富士山を、従来の固定的なイメージで捉えることからどれだけ脱却し、新しい観点が打ち出されるか、このチーム全体に問われている課題をどこまで詰められるか。

2006年度も、月例研究会を継続・活用していく中で、それぞれが研究論文にまとめる方向で進めていく予定である。

テーマプロジェクト④

「風土が作る文化」

漆原 和子

(法政大学文学部教授)

- 日 時：2006年2月17日(金) 18:30—20:45
- 場 所：ボアソナード・タワー19階 D会議室
- 参加人数：22人

次の2つの研究発表が開催され、活発な討論が行われた。複数の他大学の教員、院生達の参加のもと、多くの分野を異にする方々の意見が出され、プロジェクトにとって実りの多い公開研究会となった。プロジェクトとしても成果が上がった。

研究発表1.「屋敷囲いとしての竹富島の石垣」前門晃(琉球大学)

八重山諸島の第四紀隆起石灰岩からなる、低平な竹富島の石垣の現状についての報告がなされた。134世帯279人が住む竹富島は、NNNEの卓越風がみられるが、台風時には台風のルートによっては、どの方向からも強風が吹く。従って、主としてサンゴ礫からなる野石が家の四周を囲む。屋敷の四周を囲む型で1.3～1.6mの石垣が築かれている。東側に20～30cm高く、南側が約10cm高い。

石垣の隅は丸く、ヒンブンがあり、典型的な沖縄様式である。1970年に道路の拡張が行われ、石垣を積みなおした。その時の基準は1.3～1.5mで整えられてしまったため、どの方向も、どの家も方位による高さの差が大きくなる屋敷囲いになってしまった。1986年石垣の保存条例ができるため、今も石垣はほとんど100%残っている。母屋が堅固になったこと、1950年代ワラ屋根だったが、その後1970年までの間にカワラ屋根にかわったため、以前より低い高度の石垣で十分である。

研究発表2.「高知県東部における歴史的集落・町並みと伝統的建造物」藤塚吉浩(高知大学)

高知県室戸岬の防風に対するこの地方の民家の対策と、防風の方法ごとの分布範囲について報告があった。屋敷囲いとしての石垣は、この地方ではイシグロと呼ばれ、野石積みの他に、漆喰で固めた石垣や、カワラ屋根をつけたものまである。また、土佐漆喰を用いて、妻側や平側に水切瓦をつけたり、なまこ壁にしたり、ヤキスギをコシイタとして用いていて、家屋が潮風で弱化するのを防いでいる例の紹介があった。

強風域であり、石垣や生垣の他にも、種々の工夫が凝らされている例が示され、防風の必要条件以上に母屋に対する美意識があることが分かった。家屋や町並み形成の観点から、地域の文化を語るものであるとの紹介があり、石垣以外の素材からも地域ごとの広がりを持つ防風文化を知ることができた。



テーマプロジェクト⑤ 「日本の中の異文化」

小口 雅史

(法政大学文学部教授)

「アイヌ文化の成立と変容」研究会報告

2005年度は、「交易」と「交流」をキーワードに「アイヌ文化の成立と変容」にせまるための、少人数での徹底討論を重視する研究会を開催することにしている。すでに本ニュースレターの1号で報告した青森での「本州アイヌの諸問題」に続き、3月5日・6日と、北海道白老町にて、アイヌ民族博物館の協力により同博物館を舞台に、時代的には古代から近代まで、地域的には本州北部からサハリンに至る、当プロジェクトの対象をすべて網羅する本年度第2回目の非公開研究会を開催した。

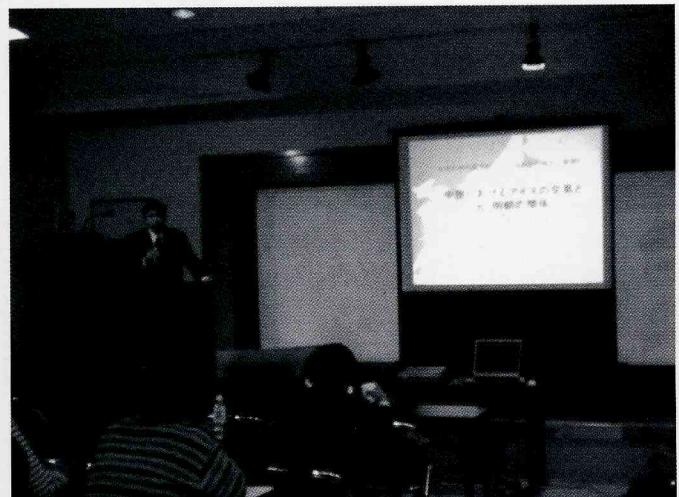
初日(司会:小口雅史)には小野裕子(北大総合博物館)「擦文文化終末年代に関する諸説のズレと土器編年の問題」・中村和之(函館工業高等専門学校)「中世におけるアイヌの交易と元・明朝の関係」(右下写真)・関根達人(弘前大学人文学部)「タマサイならびにガラス玉に関する型式学的検討」の三つの報告とそれについての討論、2日目(司会:澤登寛聰)には、市毛幹幸(弘前大学大学院)「18世紀における石狩・胆振地方アイヌの地域的特質について」・北原次郎太(アイヌ民族博物館)「樺太アイヌの木製品にあらわれる刻印と人面」の二つの報告とそれについての討論、さらに榎森進(東北学院大)の総括コメントがなされた。

小野報告は北海道～北東北をフィールドとしている考古学研究者の間で長い議論が続けられながら、いまだに定説と言うべきものがない擦文文化の終焉年代についてまとめたもの。文献史料が乏しい時代・地域でもあり、こうした意欲的取りまとめにより研究が進展することを期待したい。

中村報告はアイヌが単に南の和人とだけではなく、北の大陸方面との間でさかんに交易を行っていたことをあらためて具体的文献を提示しながら論じたもの。報告者はこの分野の研究の第一人者であり、いずれ数量的な分析にまで踏み込んでいかれることを期待したい。関根報告はアイヌの物質文化を特徴づけるものでありながらアイヌ文化圏の外から持ち込まれたものであるガラス玉について、アイヌ文化の重要な要素でありながら編年がなされていないことを問題視し、あらためてその解明に取り組んだもの。詳細な論文化が期待される。市毛報告は石狩・胆振地方アイヌの特質や、松前藩ないし幕藩制国家側の認識、あるいは地域のアイヌの自己認識について論じたもの。アイヌ文化について地域性を積極的に論じた点は注目に値する。時間内ですべてを報告しきれないほどの膨大なレジュメが用意されたので、成果報告集での論文の再構成にも期待したい。北原報告は北海道アイヌに見られない樺太アイヌの物質文化として、木製守護神に刻まれた刻印と人面との関係について、具体的な事例を紹介しながらその意味を論じたもの。ニヴフ・ウイルタとの文化的接触についても言及していただいた。

これらの諸報告は何らかの形で最終成果報告書に採り入れていきたいと考えている。

この他、北方史データベースも順調に作成が続けられている。なお本テーマプロジェクトで作成しているデータベースについては、本ニュースレターのワーキングプロジェクトの報告もあわせて参照されたい。



ワーキングプロジェクト 「成果の情報化と活用」

小口 雅史

(法政大学文学部教授)

本ワーキングプロジェクトでは従来どおり国際日本学研究センター・研究所のメンバーにより蓄積されてきた諸データのデータベース化と公開作業を続けている。

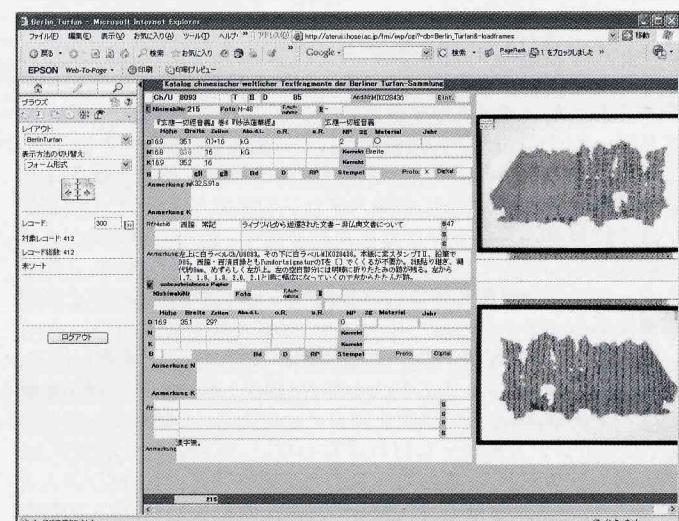
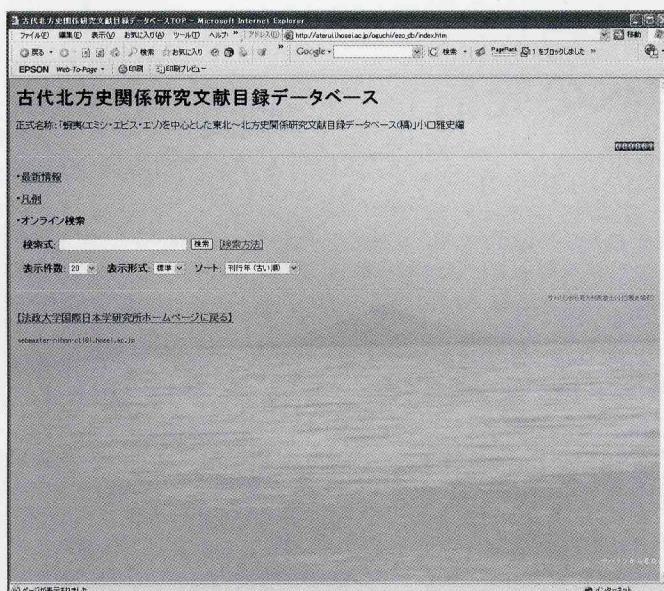
2005年度は、まず日立製作所より提供されたデジタルライブラリーシステムを利用してのデータベース公開のうち、能楽研究所のデータのコンテンツ(とくに解説部分)の充実を推進し、このニュースレターが刊行されているころには全面的に公開されている予定である。

また独自システムの構築については、テーマプロジェクト⑤「日本の中の異文化「アイヌ文化の成立と変容」グループが長期にわたって蓄積し続けている北方史関係データベースのうち、古代分野から公開準備を進めた。これは正式名称:「蝦夷(エミシ・エビス・エゾ)を中心とした東北~北方史関係研究文献目録データベース(稿)」なるもので小口の編になるものである。現時点で16,600件を超えるデータが登録公開されている。公開方法は全文検索システムとして著名なフリーソフトNamazuを用いて行われている。URLは http://aterui.i.hosei.ac.jp/oguchi/ezo_db/index.htm(左

下写真)。現在試行中でありIDとパスワードが必要であるが、セキュリティその他の確認がなされ次第、自由に利用できる形態にする予定である。またおって、中世・近世の北方史データベースも公開すべく準備中である。データ自体は着実に蓄積されてきている。

また、やはり小口が準備した「ベルリン・吐魯番文書関係データベース」についても、国際日本学研究所のWindows2000Server上のFileMaker Server 8 Advancedを用いて画像付の古文書データベースとして試験的に公開した(右下写真)。画像自体の版権の問題があって、やはりこれもIDとパスワードによって保護してある。いずれベルリン側で画像が単独で公開される予定なので、それをまつてパスワードを解除したい。

なお上記の二つのシステムともきわめて柔軟性があるので、どのようなデータであってもこれによる公開はそう難しくはない。今後当センターのCOEや当研究所の学術フロンティアによる諸成果の公開に活用していきたいと考えている。



「タイにおける留学生生活」

若曾根 了太

(国際日本学研究所学術研究員)

私は、「日本とタイの村落共同体の比較史研究」の構想に基づき、2005年6月からタイのバンコクに留学しています。

タイの生活を始めてからこれまで、主に、語学学校にてタイ語を勉強してきました。語学学校は、1日4時間、週5日授業がありました。1ヶ月で1レベルが終了し、全6レベルありました。半年間の6レベル全てを受講すると、一定程度の基礎的な会話や読み書きができるよう構成されました。

1クラスは8~10人ほどの生徒がいて、日本人・韓国人・フィリピン人・オーストラリア人・アメリカ人など国籍は様々でした。国籍が異なる皆で、一つの言葉を共通言語として、共に苦労しながら会話し、学習したことは非常に刺激的で楽しいものでした。

タイ語は、3ヶ月を過ぎた頃から、頭の中で日本語からタイ語に変換しなくとも、一応は口から自然と出るようになったかと思います。ただしそれは勿論、「生きていける」だけの日常会話の範囲であり、今でもタイ語は思うように上達していません。語学習得の難しさを肌で感じています。

今は、個人レッスンの学校にて、タイの文化や仏教、王室、社会問題、政治問題などが書かれた文献や新聞記事を読んで学習しています。

次に、タイでの生活面について触れたいと思います。

タイで実際に生活してみて強く感じることは、タイという国がいかに仏教と密接に関わりあっているかということです。タイ人の考え方や行動の土台には常にタイ仏教があり、重要な役割を果たしているのです。

例えば、最も身近に見ることができる行為として、ワードといわれるものがあります。挨拶時に、手をあわせて拝むかたちをとります。

また、タイ人は現世において徳を積めば、来世は幸福になれることを信じ、タンブンという徳を積む行為を欠かさず行います。僧侶に対してお布施を与える行為が主です。

タイには仏教行事・祭礼も数多くあります。例えば、私は11月にロイカトーンという全国規模の有名な祭礼に参加しました。この祭礼は、スコータイ時代から始まった伝統的な仏教行事です。ろうそくを灯した灯籠を河や池などに流し、河への感謝の意を示すのです。

こうしたタイ仏教に支えられた慣習や文化は、見ていてとても美しく、心が和むものです。タイに住み始めて、ふとしたところで、こうした光景に出会うことができると、タイはいいものだとつくづく感じます。

私は、もともとタイという国を考えるにおいては、宗教の問題が重要だと考えてきました。しかし、まだ短期間ではありますが実際にタイに住んで社会に触れてみて、なお一層タイと仏教の密接性を強く感じます。タイは、宗教的世界を抜きにして理解することはできないのです。

今後は、こうした宗教的世界の問題に焦点をあてながら、研究活動を進めていきたいと考えています。タイの村落共同体の民俗宗教や民俗儀礼一主に祭礼一を調べ、日本と比較して研究を進めることを構想しています。

「カンボジア日本人材育成センターと法政大学の日本からカンボジアへの発信」

諫訪井 セタリン

(国際日本学研究所学術研究員)

2006年2月21日にカンボジア日本人材育成センターの開所式がカンボジア首相と駐カンボジア日本大使の臨席で盛大に行われた。二人の所長のオム・ラヴィーと中村三樹男さんに案内され、施設見学をした。一階には、図書室、和室、コンピュータールームや多目的ホールなどがある。図書館は、準備が間に合わないため、まだ少しの本しか置いていなかった。ほとんどの書籍は日本の図書館の廃本であった。しかし、システムはコンピューターでコントロールされていて、カンボジアの図書館としては最先端の技術だといえる。二階には第一所長のオム・ラヴィーさんの部屋と第二所長の中村さんの部屋があり、さらに企画スタッフの部屋がある。その部屋にいるのは日本人スタッフがほとんどである。すべてのプロジェクトは日本人によって、企画され、実行されることが伺える。このセンターは三つの事業を行う。人材育成コース、日本語コースと交流事業である。

カンボジアの哲学者チェン・ポン氏のいっていたことを思い出す。本当の人材開発とは、人の個人と自然(風土)と社会との調和を図ることであり、体と心の調和を図ることである。人材育成を行うには、カンボジア人を知らなければならない。現在のカンボジア人、過去のカンボジア人、そして未来のカンボジア人。カンボジア人はなにか。どこから来て、どこへ行くのか。なにをして、なんの目的

でそれをしているか。裸足の彼らに靴を作つてやるなら、彼らの足のサイズを知らないなければならない。きつすぎる靴なら足が削られ、血だらけになるし、ゆるすぎても歩けない。裸足のままの状態で歩いた方がましである。

私達、法政大学国際日本学インスティテュートは、日本からの情報発信の目的や方法をはつきりすべきである。目的というのは、これまで日本の国が行ってきた表層的な国際協力や日本の利益のためにではなく、カンボジアにとって有益な情報を、カンボジア人が自立できる国、成長していく国として本気で発信するということである。今までの経験を通して、日本は文学の分野でカンボジアに大きな貢献ができると確信している。仮に、カンボジアに日本文学作品(または文化)を送る(発信する)こととしよう。その文学作品はカンボジア人に受容され、カンボジア人たちの精神に影響を及ぼすだろう。結果として現地の作家によって、カンボジア人の精神構造や考え方方に合わせた、似通った新しい作品が生みだされ、もしくは、題名だけを変え、または登場人物の名前、行動、風景などが変えられ、より現地人に親しまれ易いものに変容していくであろう。最終的にそれらの作品は人材育成に役立っているのである。

落成式のときに、中村所長が話題にした「稻村の火」は、日本では地方によって地震の代わりに洪水であつたりして物語が展開し

ていく。カンボジアでは、「チター・タド」(タドのおじいさん)として中学3年生の国語の教科書に紹介されている。偶然にもホーチミンからブノンペンに向かう飛行機の中に備えられている「エアベトナム」誌には、同じ類の物語が紹介されている。飛行機で読んだ物語はこうだ。ある村の仏教祭りのとき、人ごみの中に一人の乞食がいた。その乞食は人々に恵みを乞うたが、だれも彼女に手を差し伸べるもののがいなかった。村人は仏教儀式の方にばかり心が奪われ、実際に困った人に慈悲の心を持たない。乞食は、ある貧しく、心の優しい親子の家に行つた。泊めてくれと頼んだ。朝になって、これから洪水になるのでと親子にボートになるものをお礼として与え、洪水が起きたらそれに乗つて、山に逃げなさいと教えた。女性は村人に洪水が来ると話したが、みな気が狂つたといい、だれも聞きいれなかつた。しかし、最後に彼女は村人を洪水から助けることができた。これも「稻村の火」のベトナム版である。この物語は、大乗仏教の特徴であり、日本もしくはどこかの国が作った物語で、ベトナムに伝承され、受容され、ベトナム風になつてゐる。

日本の文化も世界中の文化の移入と同化と展開である。『源氏物語』は李白や杜甫という中国人の影響を受け、『今昔物語』もインド、

中国の影響を受けて、天竺、震旦、本朝として編集され、仏教を広めるための目的で作られている。

次に発信方法として、二つの国の違いを認識するべきである。国文学の立場ではカンボジアと直接結ぶ事が難しい。「稻村の火」はラフカディオ・ハーンによって英語で書かれたからといって、英文学なのか国文学なのかというレベルの作品分析やディスカッションに明け暮れるのではなく、作品がどういう風に世界(カンボジア)に受容され、次にどういう風に発展していったのかというレベルでみるべきである。

そういう意味において、法政大学の国際日本学インスティテュートは、積極的に発信すべきである。現在のところは経済、技術、そして、それらの分野に繋がる日本語に傾いているカンボジア日本人材育成センターに対して、文学の面、能(カンボジアの古典舞踊と共に通点がある)、即ち哲学、精神の面を発信しなければならない。現代の日本の技術書、哲学書、歴史書、法律書、数学書などを翻訳から出発し、成長し、さらに、日本の独自性もそこから発見されたことを忘れないでほしいし、文明の発展は技術と精神の同時の発展が理想的である。

国際シンポジウム「Nō Theatre Transversal」

中山 玲子

(能楽研究所教授)

2006年3月2~4日、ドイツのトリア大学において開かれた国際シンポジウム、Nō Theatre Transversal: Crossing Borders between Genres, Cultures and Identitiesに、スティーヴン・ネルソン教授とともに参加した。シンポジウムの全体は、以下の4つのパネルで構成され、最終日の午後には2時間ほど、全体討議の時間が設けられていた。

- 1) The Actor's body and voice. Acting pedagogy East and West
 - 2) Nō as/and contemporary theatre
 - 3) Nō as/and music
 - 4) Nō and modern society: ideologies, political inscription
- 参加者(パネラー・チェア・ディスカッサント)は、英国、イタリア、オランダ、フランス、オーストラリア各1名、米国6名、日本7名、ドイツ8名の、計26名。日本文学、日本学、演劇学、音楽学、演劇人類学等の研究者、演出家、役者など、専門も多岐にわたっていた。2日目の夜には能役者(梅若六郎・鶴澤久)のワークショップもあり、充実した内容のシンポジウムだったと思う。

中山は、1)の冒頭に“What kind of features distinguish Noh from other performing arts?”というタイトルの発表を、英語で行った。ネルソン教授は、3)のディスカッサントを務める他、日本人参加者のほとんどの発表・発言の通訳を行なうなど、大活躍だった。特に、全体討議の場で非常に踏み込んだ討議ができたのは、内容に精通したネルソン教授の通訳に負うところ大である。

3日間のシンポジウムでは、新作能の試みと意義、他のジャンルとの共同作業、外国の演劇や音楽への影響、女流能楽師の活動、戦時中に戦意高揚のために作られた能、山形の黒川能が現代の社会状況の中で抱える矛盾等々、伝統芸能である「能樂」が、現代社会の中で、あるいは国際的な文化交流の中で向き合ってきた(今後も向き合っていくかねばならない)様々な問題が取り上げられたが、こうした議論は最終的には「何を以て能と呼ぶか」「能の本質とは何か」という問題にも通じていく。女流能楽師を認めなかつた時代は長

いが、「能は男の役者のみによって演じられる」という説明は、今や完璧な誤りである。新作能がただ能の枠組みの中に収まっているのではマンネリズムに陥り駄作を生むだけだろうが、枠を破ろうという試みは、しかしどこまで能と言えるのか。能の境界線が広がっていくのを良しとするか危険と見るか。「黒川能」は、中央の能と同一視されることはないが、それでも能という芸能の本来の豊かさを留める貴重な例として、間違なく、黒川の「能」と認識されている。それでは「英語能」の位置づけはどうか etc. etc. どれも非常に難しい問題で、もちろん簡単に結論は出ないし、見解の一致にも至らなかつた。だが、日本人の研究者と欧米の研究者とでは意見が違い、さらに演出家や役者の視点も違うのは当然であり、様々な立場からの認識・意見を率直に交換できたのは有意義なことだつたと思う。

上記の諸例は「能」の定義や範囲に関わる問題だが、その他、能を構成する要素の一部のみを利用する方法、能からのインスピレーションを受け、能とは全く別のパフォーマンスを行つてゐる例も紹介されていた。もちろんこれらは誰が見ても「能」とは呼べず、実演している役者たちも「能」とは呼んでいないが、能という舞台芸術が、いかに現代の演劇や音楽に強いインパクトを与えてきたか(与え得るか)を示しており、別の意味で興味深かつた。

COEプログラムのタスクフォース③「世界の中の能樂」には、国際的な視野に立ち能樂研究に新しい局面を切り開いていくことが求められているが、今回のシンポジウムは、その点でも有意義であった。從来交流のあった海外の日本文学や文化の研究者とは違い、現代に生きる演劇として様々な形で能と関わっている人々の能に対する認識は、我々のそれとは驚くほど異なつてゐる。が、あまりの違いに驚いているうちに、こんなところにまで影響を与えてゐるのか、能のこういうところが新鮮に受け止められるのかと、今まで気づかなかつた能の力に思い至るようなこともあり、この経験を、何とか新しい能樂研究に結びつけていけないものかと、目下、画策中である。

活動の足取り

1. 日仏シンポジウム 『日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究—』
2005.12.1-3 フランス パリ パリ日本文化会館
 2. 國際日本学成果報告会 2005.12.17 58年館2F 総長室付属会議室
 3. 公開研究会 『日本学の型を破る—開いた日本学を目指して—』 ジャン=マリ・ブイスー氏
2006.2.16 80年館7F 大会議室1
 4. 定例研究会 『〈國際日本学〉の構築について 特に文化のローカル性とグローバル化という問題を中心に』 勝又 浩氏
2006.2.24 ボアソナード・タワー19F D会議室

今後の活動計画

1. 公開研究会 『中国の高等教育および中日教育交流』 李 東翔氏 2006.4.12 ボアソナード・タワー19F D会議室
 2. 公開研究会 ローザ・カーロリ氏(予定) 日時未定
 3. 『国際日本学研究』第2号 近刊予定

編集後記

2005年度も終盤を迎えた。気分は新年度に向かう時期である。また、可能性をたくさん詰めた蕾を抱え、新入生がキャンパスを闊歩する時期が到来する。こちらの気分もリフレッシュする。

さて、2005年度に遡れば、これまでの懸案事項であったニュースレターを3号までどうにか上梓することができた。

1号から3号の掲載内容は、日中韓、日独、日仏の3つのシンポジウムを筆頭に、国際日本学の理論的構築を目指し数次にわたり開催してきた研究会などを中核としている。

日中韓シンポジウムでは本研究センター専任所員の王敏教授が中心となり東アジア3国の研究者を招聘したこと、日独シンポジウムでは本COEプログラム研究拠点の事業推進担当者でドイツ在住のヨーゼフ・クライナー・ボン大学教授

を窓口とし全てドイツ語圏の研究者が報告にあたったこと、日仏シンポジウムでは同じく事業推進担当者でフランス在住のジョセフ・キブルツ・CNRS教授が中心となりパリでの開催にこぎ着けたことなど、これまで目指してきた各国研究者とのネットワークの構築がようやく軌道に乗ったことや、国際日本学の構築に向けた当拠点の活動にも改めて思いをはせるしだいである。

また、日本学術振興会2006年度の特別研究員に本研究所学術研究員の若木(松下)奈津美が採択されたことはこの上もない喜びである。

最後に、本紙面の作成には、研究センターおよび研究所の委員に時間を割いてその任にあたって頂き、どうにか完成にたどり着いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

(事務局)

法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学市ヶ谷キャンパス 第一校舎4階
TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884
E-mail:nihon@hosei.ac.jp
URL:<http://www.hosei.ac.jp/21coe/nihon/>

